様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　5　月　28　日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007 ～ 2009
課題番号：19520529
研究課題名（和文）学習者コーパスと母語話者コーパスに基づくアカデミックライティングの対照研究
研究課題名（英文） Contrastive Study of Academic Writing with Reference to Learner Corpus and Native Speaker Corpus

研究代表者
望月　通子（MOCHIZUKI MICHIKO）
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号：20219976

研究成果の概要（和文）：
日本の大学で学ぶ外国人留学生が書いた 800 字の課題作文 309 点を収集、加工し、日本語学習者コーパス KCOLJ_NNS として構築した。これと同じテーマで日本語母語話者が書いた課題作文 157 点を収集し、これを加工したものが KCOLJ_NS である。これらのコーパスを用いて日本語学習者言語における「なる」や「的」などの分析を行うとともに、学習者の使用傾向や誤用を考慮に入れたアカデミック・ジャパニーズ教材の開発を行った。

研究成果の概要（英文）：
We have collected and processed 309 files of 800 words that foreign students used at a Japanese university, in order to construct the Japanese learner corpus referred to as KCOLJ_NNS. We have also collected and processed 157 files composed of 800 words or less which Japanese native speakers used on the same topics, in order to construct the Japanese native speaker corpus named KCOLJ_NS. We have analyzed “naru” or “teki” based on KCOLJ_NNS as well as KCOLJ_NS. Furthermore, we have developed and produced academic Japanese teaching materials with reference to the overuse, underuse and misuse of learner Japanese.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　言語学・外国語教育
キーワード：①日本語学習者コーパス　②日本語母語話者コーパス　③学習者言語　④「なる」　⑤接尾辞「的」　⑥KCOLJ_NNS　⑦KCOLJ_NS

１．研究開始当初の背景

学習者の作文や会話などの産出データを大量に収集し、これを電子化した学習者コーパスを用いると、学習者のエラーのパターンの発見や、第二言語習得理論の仮説の検証が可能になる。また、参照コーパスとして母語話者コーパスを用いて比較すれば、過剰使用や過小使用など学習者言語の特徴を探ることができる。

コーパスは汎用コーパスと特殊目的用コーパスに大別されるが、学習者コーパスは後者に属し、1990 年代初頭より徐々に研究が進展してきた。ICLE（International Corpus of Learner English 国際英語学習者コーパス）は Granger(1998)が中心となって外国語として英語を学んでいる EFL 上級学習者（英語専攻の学部 3～4 年生）の論述文データを、母語別（2006 年の時点で各 20 万語、19 のサブコーパスから構成）に構築した国際プロジェクトである。このなかには日本人 EFL 大学生の論述文を収集した ICLE_JP（金子）も含まれている。なお、参照コーパスとしてこれと同基準で構築した英米母語話者の論述文コーパスが LOCKNESS、学習者の話し言葉コーパスが LINDSEI である。この他に、世界的によく知られている学習者コーパスとしては Longman Learners' Corpus of Learner English や Cambridge Learner Corpus があるが、これらは出版社が辞書編纂や言語テスト作成の目的で構築した大規模学習者コーパスである。

一方、日本国内においても、近年、英語を中心として学習者コーパスが構築されている。1200 人以上の英語インタビュー・データを収集した NICT JLE Corpus（ 和泉他 2001 ）、1 万人以上の日本人中学生の作文を収集した JRFLE Corpus（ 投野 2007 ）、大学生の論述文を収集した NICE (杉浦:2007)などが知られている。

しかし、このように進展がめざましい国内外の英語学習者コーパスに比べて、日本語学習者コーパスの構築やこれに基づく研究は大幅に遅れているのが現状である。そういう現況の中で、2007 年の本研究開始時点には次のような電子資料があった。

①日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対話 DB オンライン版（15 か国 636 名分、674 編)の学習者作文とその対訳、
②北九州市立大学国際環境工学部情報メディア工学科上村研究室によるテキストと音声（一部ビデオ）による会話コーパス（日本語学習者と日本語母語話者のデータ)、
③名古屋大学学習者コーパス（就労ブラジル人の発話も時価資料と日本語研修生追跡　データ)、
④東大アーカイブ（大学院総合文化研究科言語情報科学専攻アーカイブ委員会による日本語学習者の語用例 DB で現在作成中)、
⑤KY コーパス（OPI を利用した話し言葉コーパスで中国語、英語、韓国語の各言語を母語にもつ日本語学習者初級 5 名、中級 10 名、上級 10 名、超級 5 名、計 30 名ずつ、総計 90 名の DB）などである。

２．研究の目的

本研究を行う目的として、次の(1)～(4)を設定する。

(1) KCOLJ_NNS（Kandai Corpus of Learners of Japanese_Non-Native Speakers 関大非日本語母語話者コーパス）および KCOLJ_NS（Kandai Corpus of Learners of Japanese_Native Speakers 関大日本語母語話者コーパス）の構築

(2) KCOLJ_NNS および KCOLJ_NS に基づくアカデミック・ライティングにおける日本語学習者の動詞および形容詞の使用傾向の研究

(3) 上掲した(2)の研究成果を取り入れ、アカデミック・ジャパニーズ用の日本語教材の開発

(4) ICLE のデザインと分析、学習者言語の文法・語彙・談話の研究、およびその教育への応用など学習者コーパス全体について理論、方法論、コーパススキルを網羅的に論じた先駆的な学術書である *Learner Corpus on Computer* （ 1998 ）の翻訳（『英語学習者コーパス入門―SLA とコーパス言語学の出会い』2008 年 3 月研究社刊 ）

３．研究の方法

研究目的に明示した通り、本研究の最終目的は、日本語学習者言語コーパス KCOLJ_NNS および KCOLJ_NS の構築、同コーパスに基づく動詞・形容詞の研究、およびその成果を取り入れたアカデミック・ジャパニーズ教材の開発であるが、学習者言語コーパスの構築や分析を推進するには、この領域での実績を

すでに示している英語学習者コーパスの知見を参考にする必要がある。その趣旨に沿って、本研究では第1フェイズとして英語学習者コーパスに基づく研究、第2フェイズとして日本語学習者コーパスの構築、第3フェイズとして語彙・文法の研究、第4フェイズとして日本語教材の開発を行うという進め方を採用した。

＜第1フェイズ＞

1) *Learner Corpus on Computer* (1998)の翻訳(『英語学習者コーパス入門—SLA とコーパス言語学の出会い』2008年3月研究社刊 総頁数272)

原書の出版からすでに 10 年経過しているものの、学習者コーパスを志す者にとって貴重な指針となり得る。コンピュータによるデータ処理やデータ分析など長足の進歩を遂げる第2章「学習者コーパス分析のためのコンピュータツール」だけは、現在の水準にアップデートしてもらうために著者の Fanny Meunier 氏にリライトを快諾してもらった。

翻訳の第1原稿は、序文・序論・第1～第5章・第7～第9章を研究代表者の望月、第6章を研究協力者の船城道雄、第10章・第13章を同協力者の大野千鶴、第11~第12章・第14~第 15 章を分担者の佐久正秀が分担した。集まった原稿は、望月と船城および出版社の翻訳助言者の3名の合議で詳細にわたる綿密な加筆修正を行うとともに専門用語や表現の統一を図った。

2) Gaëtanelle Gilquinë (新ルーヴァン大学英語コーパス言語学センター F.N.R.S 研究員) によるワークショップの開催 2007 年9月 3-5 9-11)

ICLE や LINDSEI 学習コーパスのデザイン、CIA(対照中間言語分析)、 get を例に ICM(統合的対照モデル) の説明、Phraseology についての勉強会を行った。

3) ICLE-JP (総語彙数 200,827) および LOCNESS (168,314) を用いて、日本人大学生の MAKE (軽動詞) の使用に関する研究を行った。

4) 日本語学習者コーパスを構築するためのパイロット調査として外国人留学生の書いた日本語作文データの収集・分析を行った。

＜第2フェイズ＞

1) KCOLJ_NNS および KCOLJ_NS の構築

2008年度の春学期と秋学期のコースで、アカデミック・ライティングの練習の一環としてほぼ毎週、60分、原稿用紙800字以内、電子辞書使用可、教師によるフィードバック有の条件で外国人留学生（学部1回生）が書いた課題作文を、本研究プロジェクトの関係者が教育・研究・開発の目的に使うことについて文書で許諾を得たうえでデータ収集をした。秋学期用のデータのみコーパス化したのが、KCOLJ_NNS (Kandai Corpus of Learners of Japanese_Non-Native Speakers, 関大学習者日本語コーパス・非母語話者版) で作文総数は309ファイルである。

同様に KCOLJ_NS (Kandai Corpus of Learners of Japanese_Native Speakers, 関大学習者日本語コーパス・母語話者版) は、20 歳以上の日本人学生及び一般人に辞書使用や時間の制限を設けずに一つのテーマにつき800字前後のライティングを作成するように有料で依頼し、文書で許諾を得たうえでコーパス化したもので、作文総数は157ファイルである。作文は電子データ、個人情報と契約書は紙媒体で提出してもらったが、作文の一部は紙媒体で、提出後、電子化した。

母語話者と非母語話者を比較するために、母語話者も非母語話者も同一テーマで課題作文を作成したが、以下がその一覧である。

1)私の町の自然
2)お金と幸せについて
3)自殺について
4)スポーツ
5)TV における暴力シーンについて
6)10代の若者について
7)学校教育について（母国の場合）
8)自立について
9)離婚について
10)リサイクルについて
11)ネット犯罪について
12)死刑は廃止すべきか
13)教育と男女差について

テーマの選定にあたり、ICLE、LOCNESS、NICE のテーマを参考にしながら、社会や文化状況に支配されることが少なく、誰にとっても書きやすく意見を述べやすい普遍性に富むと思われるものを採用した。ライティングと同時に著者の個人情報を収集したが、個人情報に配慮しながら、習熟度別・母語別などの条件別の分析が行えるように、それぞれのデータファイルにヘッダ情報としてファイルの先頭部分に記入している。学習者のデータファイルには、性・母語・外国語・日本語レベル・日本滞在歴、母語話者については性・年齢・職種などの項目が記録されているのである。

データの整形

データの加工は研究協力者の阪上辰也を中心にして望月と船城が作業を行った。Word

ファイルのままでは加工、検索、抽出などのデータ処理には適さないため、テキストエディタでテキストファイルとしてデータを保存しなおした。

KCOLJ では「1 行 1 文」の形式でデータが記録される CHAT 形式というフォーマットを採用した。CHAT フォーマットはとりわけ 2 つの利点がある。1 つは、データの確認が容易な点である。コーパスを処理するときに記号類の処理などでいろいろな問題が出てくるが、処理が成功しているかどうかを確認するにはデータそのものを目で見てその内容をチェックしなければならない。たとえば、誤用を観察する時に何が誤用となり、なぜ誤用なのかをチェックするにはデータそのものを目で見て内容を解釈する必要が出てくる。処理や分析時の作業上の過誤を防ぐ意味でも読みやすさに配慮した CHAT フォーマットが望ましいということになる。

この CHAT フォーマットのもう一つの利点は、データの数値化が効率よく行える点である。単語や文の総数、単語や文の長さなどについて、CHAT フォーマットでは、1 文単位で区切られているため 1 文がいくつの単語で出来上がっているかといった文の長さなど、めいめいの学習者が作成した文数を効率よく求めることができる。とりわけ、学習者と母語話者との比較を行う場合は、単語数や文数といった数値をよく利用するので CHAT 形式のフォーマットにしておけば短時間で必要な数値を打ち出すことができる。

＜第 3 フェイズ＞　語彙・文法の研究

KCOLJ_NNS および KCOLJ_NS を用いて、母語話者と学習者の作文における使用傾向について「過剰使用」「過少使用」「誤用」の分析を行った。

(1)接尾辞「的」に関する研究

①まず、予備実験として、日本人大学生と外国人留学生を対象に短文作成の課題を依頼し、「的」に関する知識を調査した。

②コーパスを用いて、作文における「的」の使用傾向を分析した。

(2)変化を表す「なる」への接続形式の使用傾向を探った。

(3)「付く」「付ける」を含む 30 項目についてその使用傾向を探った。

＜第４フェイズ＞　教材の開発

(1)複合環境におかれている外国人大学生の日本語不安についての質問紙法による調査を行った。

関西大学の出版助成を受けて、次の教材開発を行った。

(2)動詞とのコロケーションの使用能力を強化するための教材開発としてクローズテスト法を使った content-based のアカデミック・ジャパニーズ教材 1(12 トピック)と 2(10 トピック）を開発した。

(3)上掲(2)のクローズテストの結果を分析し、これを踏まえて自律学習教材『アカデミック・ジャパニーズへのステップ 1　語彙・文法の整理と演習』を開発した。動詞 11 項目、複合動詞 6 項目、名詞 5 項目、イ形容詞 2 項目、ナ形容詞 3 項目、副詞 1 項目、助詞 2 項目、接続辞 12 項目、慣用表現 4 項目を取り上げ、説明と練習問題で構成している。関西大学の CEAS システムを使って PC 上でチェックテストが受けられるようにアップロードしている。

(4) 自律学習教材『アカデミック・ジャパニーズへのステップ 2　語彙・文法の整理と演習』では 50 項目取り上げ、誤用や用例には KCOLJ_NNS および KCOLJ_NS を使用している。

４．研究成果

本研究によって、助成期間中に成し得た成果は次の通りである。

(1) KCOLJ_NNS (Kandai Corpus of Learners of Japanese_Non-Native Speakers 関大非日本語母語話者コーパス) および KCOLJ_NS (Kandai Corpus of Learners of Japanese_Native Speakers 関大日本語母語話者コーパス) の構築：

両コーパス(NNS:309 NS:157)ともデータ収集及び加工を終え、研究・教育・教材開発に使用し始めている。母語話者コーパスについては公開が可能であるが、学習者コーパスについては本プロジェクト関係者以外の使用に向けては再度許可を取る必要がある。また、漢字処理やエラータグ付けについては引き続き作業を行うことになっている。また、国際日本語学習者コーパスとして、JFL および JSL の母語別作文データを増加する予定である。

(2) KCOLJ_NNS および KCOLJ_NS に基づくアカデミック・ライティングにおける日本語学習者の動詞および形容詞の使用傾向の研究：

「的」および「『なる』への接続形式」の使用傾向について分析した。「付く」「付ける」を含む 30 項目についてその使用と誤用の傾向については引き続き分析中である。

(3) 上掲した(2)の研究成果を取り入れ、ア

カデミック・ジャパニーズ用の日本語教材の開発を行い、3 冊刊行した。このうち、1 冊は自律学習用教材で、各項目の自動採点式テストがPC上で受けられるようになっている。現在は学内に限られているが、近日、本プロジェクトのコーパスに基づく練習サイトを立ち上げる予定である。

(4) ICLE のデザインと分析、学習者言語の文法・語彙・談話の研究、およびその教育への応用など学習者コーパス全体について理論、方法論、コーパススキルを網羅的に論じた世界で初めての先駆的な学術書である *Learner Corpus on Computer* (1998)の翻訳（『英語学習者コーパス入門―SLA とコーパス言語学の出会い』2008 年 3 月研究社刊 ）

５．主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２　件）

①望月通子、接尾辞「～的」の使用と日本語教育への示唆―日本人大学生と日本語学習者の調査に基づいて―外国語学部紀要、関西大学外国語学部、査読なし、第 2 号、2010、1-12

②望月通子、日本人大学生のEFL学習者コーパスに見られMAKE の使用、関西大学外国語研究、査読なし、第 14 号、2007、31-45

〔学会発表〕（計２　件）

①望月通子、日本語学習者と母語話者の「的」の使用の研究―コーパスを利用して、2010 世界日本語教育大会、審査有、2010 年 8 月 1 日、国立政治大学、台北市（登録済み）

②望月通子、佐久正秀、日本人学習者・母語話者・外国人学習者のライティングにおけるMAKEの使用の研究、第 37 回中部地区英語教育学会三重大会、審査有、2007 年 6 月 24 日、三重大学

〔図書〕（計　4 件）

① 望月通子編著、アカデミック・ジャパニーズへのステップ 1 語彙・文法の整理と演習、2010、関西大学出版部、1-94、分担執筆者：望月通子、佐久正秀、芦媛媛、鍾華、萩野里香、橋本修妃

②望月通子編著、トピックでみがく留学生のための大学日本語 2 ―インプットからアウトプットまでこだわってみがきあげる篇、2009、関西大学出版部、1-82、分担執筆者：望月通子、萩野里香、石橋美子

③望月通子編著、トピックでみがく留学生のための大学日本語 1―インプットからアウトプットまで快適にみがく篇、2009、関西大学出版部、1-98、分担執筆者：望月通子、佐久正秀、萩野里香、古田朋子

④船城道雄、望月通子監訳、英語学習者コーパス入門、2007、研究社、1-272、邦訳分担者：望月通子、佐久正秀、船城道雄、大野千鶴、[Granger, Sylviane, *Learner Corpus on Computer*,1998,Addison Wesley-Longman Limited]

６．研究組織

(1)研究代表者
望月　通子（MOCHIZUKI　MICHIKO）
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号：20219976

(2)研究分担者
佐久　正秀（SAKU　MASAHIDE）
大阪信愛女学院女短期大学・初等教育学科・准教授
研究者番号：30390131
（H19→H20：連携研究者）

(3)連携研究者
阪上　辰也(SAKAUE　TATSUYA)
名古屋大学・国際開発研究科・特任助教
研究者番号：60512621
(H21：連携研究者)

(4)研究協力者
船城　道雄(FUNAKI　MICHIO)
静岡大学・教育学部・名誉教授

大野千鶴(OHNO　CHIZURU)
静岡大学・非常勤講師

萩野里香(HAGINO　RIKA)
神戸創造学園・非常勤講師

古田朋子(FURUTA　TOMOKO)
関西大学大学院外国語教育学研究科博士課程前期課程

芦媛媛(RO　ENEN)
中国・仲愷農業工程学院・日本語専業助教

鍾華(SHOH　KA)
中国・東北大学・外国語学院日語系・専任講師（H21→関西大学大学院外国語教育学研究科交換派遣）

橋本　修妃(HASHIMOTO　NAOI)
関西大学大学院外国語教育学研究科博士課程前期課程

南方　里依子(MINAKATA　RIEKO)
和歌山 YMCA 国際福祉専門学校講師